

提言

「狭山が教えてくれること」

「狭山事件は殺人事件ではありません。部落差別事件です。」

6年前、旭志中学校に赴任し、「5・23校内人権集会」で聞いた解放子ども会の子たちの訴えだ。私の中では「過去の部落差別事件」として捉えていたものを、目の前の子たちは「今なお続く部落差別事件」として捉えていた。狭山事件は、私が生まれる前の出来事で、子どもたちにとっても、はるか昔の出来事であるはずだ。なのに、なぜ？

旭志解放子ども会は、毎年「狭山現地調査」を行っている。1993年から始まったこの取組が、子どもたちに教え続けていることは何か。何も分からな

いま、狭山へ行き、石川さん

と出会った。石川さんは子どもたちに「勉強となかまづくりを頑張っ

てほしい」と伝えられた。私のようにならないでほしい、しかし、看守さんと出会った後の私のようになってほしい、と



旭志中学校

松本 淳児 さん

いう願いを込めて。それはまさに、差別と闘い続けている姿であり、「今なお続く」部落差別の姿なのだ。あれから6年、毎年石川さんと出会い、変わらぬ石川さんの願いを、子どもたちと一緒に聞き、学習会で学びを深めている。

今年の狭山現地調査では、石川一雄さんからこんな話をしていただいた。

「再審が始まれば、私の無実が明らかだと思うが、油断はしません。そして、無実を勝ち取って終わりじゃないんです。無実が証明されたら、今度は、なぜ私が犯人にされたのかというの

を明らかにしていかなければならないと思っている。だから、支援者の皆様には申し訳ないが、無実になっても、お礼を言っ

て回することはできないと思う。私にはまだまだ長い闘いが残されているので。」

そこに部落差別があったことを証明しなくてはならないという強い思い。早智子さんから、一審で死刑判決が出された時の思いを聞いた。部落差別があったから、文字の読み書きができない、世の中のことを知らない石川のような青年が育ってしまった。なのに、そうだったのは石川本人の責任であるとして、死刑を言い渡す。「これって石川の責任ですか？だからこれは差別の判決だと思っ

でも文字の読み書きができないままだったでしょうし、こんなふう

に世の中を見てもいいじゃないと思う。警察に騙されたけど、私を救ってくれたのも警察の方です。結果的にはよかったと思う」と。

差別と闘う中で取り戻していった自分や、共に差別と闘うなかまとの出会いなど、解放運動の「誇り」を、より強く伝えようとされる。それを感じ取った解放子ども会の子が、進路公開で「もう一度みんなを信頼して、自分も信頼される人になっていきたい」と学級で訴えていった。

になり、シブプレヒコルを上げながら、東京の街を歩いていく。周りは知らない人ばかり。でも、ここにいるみんながな

まだと思えるあの瞬間に、こちらが元気をもらえる。「会いたい人がいるから、そこに行く。」辛島公園の座り込みに行くムラの青年がそこに行く理由をそう述べた。自分が元気をもらえるように、自分も誰かの元気になるべという思い。これがつながっていく、ということではないだろうか。「部落差別をはじめあらゆる差別をなくす熊本県人権子ども集会」も、「狭山」から始まった取組だし、同じようにつながれる場である。「元気をもらいに行こうよ。そうしたら、あなたが誰かの元気にもなるよ。」子どもたちには、そんな思いで集ってほしいし、それが「狭山」の思いをつなげることに

近に「狭山」を持っておきたい。